

Filomeno V. Aguilar, Jr.,

*Clash of Spirits: The History  
of Power and Sugar Planter  
Hegemony on a Visayan Island.*

Quezon City: Ateneo de Manila University  
Press, 1998, xiii + 313 pp.

なが の よし こ  
永 野 善 子

はじめに

著者フィロメノ・V・アギラル Jr. はオーストラリア・クィーンズランド州のジェームズ・クック大学歴史・政治学部で教鞭をとる、気鋭のフィリピン研究者である。フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学を卒業後、イギリスのウェールズ大学で修士課程を修了し、アメリカのコネル大学で博士号を取得した。彼はコネル大学大学院で学ぶまえ、農村社会学専攻の立場から、フィリピン米作農村における土地なし労働者層の存在形態(Aguilar, Jr. 1981)、北部ルソン地方の社会林業(Aguilar, Jr. 1982)、ネグロス島砂糖キビ作地帯の貧困問題(Aguilar, Jr. 1984)についてモノグラフを発表していた時期がある。

広く知られるように、フィリピンの砂糖産業は1980年代半ばに国際砂糖相場の暴落の影響を受け衰退した。長らく砂糖モノカルチュア経済を維持してきたネグロス島では、砂糖キビ農園(アシエンダ: hacienda)労働者の失業問題が深刻な社会問題となった。西ネグロス州の州都バコロド(Bacolod)市のラサール大学バコロド校には社会研究センターがあり、同州の社会経済問題について数多くのモノグラフが出版された。それらの多くが完成度の低い報告書にとどまったのに対し、アギラルによるネグロス島砂糖キビ作地帯の貧困問題に関する上記のモノ

グラフは、基本的な調査方法を踏まえたしっかりした内容のものであった。

アギラルはコネル大学大学院で学ぶなかで、それまでの社会学的アプローチから歴史人類学的アプローチへと大きくシフトし、フィリピン社会の歴史的展開過程をより多面的に分析するための手法を身につけることになる。そしてスペイン、アメリカ、イギリス、フィリピンでの精力的な資料調査やインタビュー調査を踏まえ、砂糖モノカルチュア経済の形成過程におけるネグロス島の社会史を書き直す試みを行った。本書は、1992年に提出された学位論文: "Phantoms of Capitalism and Sugar Production Relations in a Colonial Philippine Island" をもとに執筆されており、19世紀後半のスペイン植民地期末期に形成され、アメリカ植民地期に変容を遂げた砂糖アシエンダをめぐるさまざまな社会的関係、文化的意味、政治闘争についての議論が縦横無尽に展開されている。

本書の構成は以下のとおりである。

序章

第I部 植民地的魔術、現地の人々の競演

第1章 精神の衝突——修道士の権力とメーソン資本主義

第2章 闘鶏と妖怪——服従と抵抗のギャンプル

第3章 すばしっこい農民、弱い国家——刈分け小作制と変わる債務の意味

第II部 1855年以降のネグロス産砂糖の世界

第4章 ネグロス島の地主アセンデーロ階級の形成

第5章 「労働者を請い求める資本家たち」——スペイン植民地期ネグロス島のアシエンダ的諸関係

第6章 メスティーソ権力をめざして——メーソンの権力と政治的運命の賭け

第7章 アメリカ植民地国家——砂糖を農業革命で甘やかす

## I 問題意識と方法論

本書における著者の問題意識と方法論は、序章で明らかにされている。従来の研究によれば、ネグロス島の歴史は、ひとつのパラドックスを提示している、という。この島は1855年に隣接するパナイ島のイロイロ港が開港されるまで、ほとんど無住の未開拓の地であった。イロイロ港の開港以後、またたくうちにフィリピン最大の輸出用砂糖生産地帯へと変貌した。一般にアシエンダと呼ばれる砂糖農園では、隣島から移民してきた地主（アセンデーロ；hacendero）のもとで、同じく隣接する島々出身の多くの出稼ぎ労働者が働いた。急速に拡大する世界資本主義の時代にあって、砂糖アシエンダでは、「先進的かつ古めかしい生産様式」を取り入れることになったのである。しかし、このように理解されてきた「変則」は、先行研究が人工的に生み出した議論によるところが大きいと、著者は主張する。

ネグロス島の砂糖アシエンダ制の性格づけに最も大きな影響を与えた先行研究は、アルフレッド・W・マッコイ (Alfred W. McCoy) 論文である (McCoy 1982)。同論文を所収する『フィリピン社会史——世界貿易と地域の変容』(McCoy and de Jesus 1982) は、米・比・豪のフィリピン史研究者の執筆になるフィリピン地方史研究の集大成として、刊行以来高い評価を得てきた。マッコイによれば、ネグロス島のプランテーション経済は世紀転換期までにフィリピンのほかの地域はもちろん、東南アジアでも見られない特徴ある社会システムへと転化した。アセンデーロたちは「資本家的本能」にもとづき、監督された労働者の一団を雇った。彼らは「名目的日払い賃金」で働く労働者たちを管理するために、付随的に「債務による束縛」と「体罰」を行使した。このようなかたちで「先進的かつ古めかしい生産様式」をもつとする、アシエンダ制についてのマッコイの見解は、その後、ビオレータ・ゴンサガ (Violeta Gonzaga) やジョン・ラーキン (John Larkin) らの研究者たちによって踏襲された。

ところが、アギラールによれば、マッコイらの先

行研究によるネグロス島の砂糖アシエンダの性格規定は、19世紀後半にアシエンダが形成されるやいなやアセンデーロが確固たる地位を築いたとするものであり、ネグロス島の社会構造はそれ以来まったく変化がなかったとする見方につながることになる。かくして、歴史研究はこの時点で無意識のうちに終息し、社会を構成する諸要素についての考察は静止的かつ非歴史的性質をおびるのである。他方、アギラールにとって、社会構造は変転するものである。このため、ネグロス島の社会を歴史的に考察するには、その構成要素である諸階級の形成と階層制度の継続的变化過程を理解することが重要となる。与えられた社会的諸現象の表面的継続性について疑い、目に見えるそのかたちとは別に、社会生活のなかの人目につかない流動性を観察しなければならない、と。

さらに、従来の研究では、さまざまな階層からなるネグロス島の人々の日常生活に踏み込んだ考察に欠けているとし、著者は、社会の重要な構成要素として文化に注目していく。彼にとって、文化とは、ネグロス島の生産諸関係の構造化と社会的世界の形成において重要な要素なのである。こうして本書では、ネグロス島の社会構造を規定する権力関係と世界的・歴史的諸力を通して、人々が知覚し、抵抗し、受容する、知識と思考の土着固有の構造が再構成されることになる。神話や民衆の考え方、そして生産の様式や社会生活の再生産に密接に関係のある観念的諸要素を分析することによって、過去の世代に属する人々の世界観を解説する試みが営まれる。

従来のネグロス島の社会史がとりわけ社会・政治・経済をおもな考察対象分野としていたのに対し、本書では、文化の歴史的役割が強調されている。本書の書名である「精神の衝突」は、近年注目を集めたサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」(The Clash of Civilizations) (ハンチントン1998) からヒントを得たものであろう。このことは、文化が社会の構造と変化の規定的要因であるとする文化主義的アプローチに、著者が大きくシフトしていることを意味するものである。もっとも著者は、文化と政治および経済との関係を強調することによって、今

日隆盛をきわめるカルチュラル・スタディーズを乗り越えたいとの願望をもっている。このような多面的・複眼的観点からネグロス島史をまとめたところに、本書の特徴がある。

## II 新しいネグロス島史像を求めて

本書の第I部では、フィリピン史の全般的流れを再解釈する試みとして、まず先スペイン植民地期の現地住民の世界観と社会的諸関係について考察されている。ついで、16世紀後半から19世紀前半までの時期に、スペイン人植民者と被植民者の対抗関係のなかでかたちづくられたフィリピン社会の政治的・経済的・文化的変化が議論されている。これに対して、第II部では、1855年にイロイロ港が開港されてからアメリカ植民地期にいたる、ネグロス島の砂糖アシエンダの形成と変容に関する歴史がさまざまな観点から再構成されている。

第4章から第6章では、19世紀後半を考察の対象時期とし、アセンデーロや農園労働者の起源、彼らの受容と抵抗の日常的戦略、そしてスペイン植民地支配の打倒に向けた土着のシャーマンと砂糖プランターの闘いについての議論が展開されている。そして、終章にあたる第7章では、アメリカ植民地統治下の新しい状況のもとで、砂糖産業が新たな要因によって動かされ、資本家の利益のもとに同産業が統合・分解する過程が描写されている。

このように本書では、新しい問題意識にもとづき、アシエンダの形成とその変容過程を軸としてネグロス島の新しい歴史像を提示しようとしている。このため、従来の研究では議論の対象とならなかった、ネグロス島住民の世界観にも立ち入った考察を行っている。さらに著者は、カトリックを布教してきたスペインの植民地支配下にありながら、プロテスタントが大多数を占めるイギリスやアメリカを出自とする商会の進出によって、19世紀後半にフィリピンにおける輸出経済の展開がはじめて可能となった事実注目する。そして、カトリック教会権力に異教としてプロテスタントやフリーメーソンを対置し、イギリス系やアメリカ系商会によって主導されたフ

ィリピン・モノカルチュア経済を「メーソン資本主義」(Masonic Capitalism)と呼ぶのである。

もっとも、評者の観点からすると、「メーソン資本主義」の概念によってフィリピン・モノカルチュア経済の特徴をどれほど明確に示すことができるのか、いささか疑問の残るところである。むしろ、輸出経済の担い手が現地の地主層であったことに着目すれば、「メスティーゾ資本主義」(Mestizo Capitalism)あるいは「カシケ資本主義」(Cacique Capitalism)とでも命名したほうが適切のように思われる。

## III アシエンダ制の解釈をめぐる

とはいえ、ネグロス島社会の政治的・経済的・文化的変容過程を「さまざまな物語」(narratives)として表現しようとするアギラールの試みは、野心的である。なかでも評者の関心をくぎづけにしたのは、アシエンダ制の性格規定についての彼の見解であった。

アギラールは、19世紀後半のネグロス島のアシエンダは賃労働雇用制にもとづいて経営されていたのではなく、刈分け小作制が主要な経営形態であったと主張する。収穫期には大量の出稼ぎ労働者が隣島からやってきたが、アシエンダの耕作地は分割され、刈分け小作農がその経営にあっていた、という。アギラールによれば、スペイン植民地期末期の「弱い国家」のもとでは、アシエンダに居住労働者をとどめておくための経済外的強制は機能せず、小作制の方がより安定的経営を維持することができた(第5章)。ところが、アメリカ植民地期になると、従来の小規模なムスコバド(muscovado)糖の製糖所にかわって、セントラル(central)と呼ばれる大規模な製糖工場がつぎつぎに設立され、これまでより組織的に砂糖キビ作農業を営む必要が生まれた。こうした製糖業部門の近代化が大きな動因となって、ネグロス島のアシエンダでは、それまでの刈分け小作制から賃労働雇用制へと大きく旋回することになった、という(第7章)。

上記のアギラールの見解は、19世紀後半にすでに

賃労働雇用制がアシエンダで成立していたという、従来の定説をくつがえすものである。そして、刈分け小作制から賃労働雇用制への移行期は、多くの製糖工場が設立された1920年代であるとし、アシエンダが形成されはじめた19世紀後半ではない、と主張する。こうして、アギラールは、ネグロス島のアシエンダ制を固定的・静態的にとらえるのではなく、さまざまな社会的・政治的・経済的諸条件のもとで変化が起きることを裏づける試みを行うのである。

評者は、このようなアシエンダ制の歴史的变化過程を追跡しようとする、著者の姿勢におおむね賛成である。とりわけアメリカ植民地期の製糖部門の近代化過程におけるアシエンダの経営形態の変化については、これまでほとんどといってよいほど立ち入った研究はなかった。それだけに、『シュガーニュース』(Sugar News)に掲載された多くの記事や1918年センサスと39年センサスを駆使して、1920年代から30年代にかけてネグロス島で刈分け小作制下の砂糖キビ作地が減少し、賃労働雇用制がアシエンダの主要な生産形態へと変貌した過程が明らかにされたのは、大きな成果である。

しかし、評者は、19世紀後半のネグロス島のアシエンダは賃労働雇用制にもとづいて経営されていたのではないという、アギラールの主張を全面的に支持するわけではない。評者は、19世紀末葉においてネグロス島で賃労働雇用を基調とするアシエンダが一部の地域で形成されていたとみている。アギラールが本書で引用しているように、評者は、1880年代のムスコバド糖製糖所の合理化(より大きい圧搾機の導入)が、刈分け小作制から賃労働雇用制への移行の重要な要因であると考えており、19世紀半ばにネグロス島で輸出用砂糖生産が開始された直後からほぼ同様の生産形態がアシエンダで維持されたとするマッコイらの議論とは異なる見解を提示してきた(Nagano 1982)。

19世紀末のネグロス島に関する史料を読むと、当時の大多数のアシエンダでは刈分け小作制のもとで砂糖キビ栽培が行われていたが、賃労働雇用制がすでに導入されていたアシエンダの存在を否定することはできないようである[永野 1990]。したがっ

て、一方で刈分け小作制にもとづく経営が大多数を占めつつ、他方で、賃労働雇用を基調とするアシエンダが少数ながらも誕生した、ネグロス島の社会的経済的諸条件(たとえば、急激な人口膨張など)を明らかにすることが重要であろう。

さらに、アシエンダでは砂糖キビのみならずコメその他の作物も栽培されていたのであり、アシエンダではどのような分業関係のもとで多角的な農作業が行われたのかを明らかにする必要がある。そうすることで、一方で刈分け小作農でありながら、他方で賃金労働者の役割を担う、アシエンダ内労働者の二重性格を描くことができるのではなかろうか。アシエンダにおける刈分け小作制から賃労働制の移行形態を考察すると同時に、刈分け小作制と賃労働制の共存形態について、よりつつこんだ議論が求められているのである。

#### む す び

冒頭で述べたように、1980年代初頭に公刊されたMcCoy and de Jesus (1982)は、その後のフィリピン地方史研究に多大の影響を与えてきた。ここに紹介したアギラールの著作は、そうした先行研究の成果を批判的に継承しつつ、あらたな地方史研究の地平を切り拓こうとする、若手フィリピン人研究者の努力の成果である。今後、ネグロス島史のみならず、フィリピンのさまざまな地域の地方史についても同様の試みが営まれることを望んでやまない。

#### 文献リスト

- サミュエル・ハンチントン 1998. 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社。  
 永野善子 1990. 『砂糖アシエンダと貧困——フィリピン・ネグロス島小史』勁草書房 第3章。  
 Aguilar, Filomeno, Jr. 1981. *Landlessness and Hired Labour in Philippine Rice Farms*. Swansea: Center for Development Studies, University College of Swansea, Monograph Series (14).  
 —— 1982. *Social Forestry for Upland Development:*

*Lessons from Four Case Studies*. Quezon City: Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.

—1984. *The Making of Cane Sugar: Poverty, Crisis and Change in Negros Occidental*. Bacolod City: La Salle Social Research Center, Monograph Series (2).

McCoy, Alfred W. 1982. "A Queen Dies Slowly: The Rise and Decline of Iloilo City." in McCoy and de Jesus 1982.

McCoy, Alfred W. and Ed. C. de Jesus, eds. 1982.

*Philippine Social History: Global Trade and Local Transformations*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Nagano, Yoshiko 1982. *Formation of Sugarlandia in the Late 19th Century Negros: Origin of Underdevelopment in the Philippines*. Quezon City: Third World Studies Program, University of the Philippines, Diliman, Research and Working Paper Series (12).

(神奈川大学外国語学部教授)